

か生れたら、日本は事實獨特な兵學をも
持つのであると思ふことは出来なから、この問題
は大卒の學の生む代に兵學の教官と可なり合つて
退役にならざるも事實もあつた。

沖繩の名將達は果して名將であつたか。

牛島將軍は實際の所 士官學校の校長
が適職最高の人があつたらう。 軍は何事

長考謀略に委任してゐた。 委任と云ふより

抛擲してゐたと云ふ方があつてゐるかも知

れない。 最大限の讀解を以てするならば 沖繩の

乃木將軍のあり、沖繩の、西郷のあつたかも知

れなから。 又、神の明察によつて 沖繩の帰還

を知らしめ、研究してゐるのも

知らなから

何といつても一番の欠点は此の大作戦に

大方針を堅持し 指導統帥しなかつた一

にある。 もつと つつしんじ云ふならば 勝利への

努力を懈はず、 鹿児島健兒的 言動に

終始してゐた事がある。 但部下への 愛情

は溢る、水の如くであり 誠に几帳面であ

つた。

牛島將軍の名せ、房後長考謀略は

曾々張敷山峯軍變を 志願勇果の

聯隊長ふりて稱せられ 又 国内革命の

急先鋒として 軍力による 革命を 酒間

に計画した 団士的な人物であると思はれ

るに、沖籠いはどういふものか。
杯をふくみ、蛇眼空をみる人の言、誠は
正と云はなければならぬ。俠客的言動は
聞くものとして、過仰せしめた。

沖籠作戦間、各戦機毎の戦術的対策は
殆んど、彼の方寸より出たと云ふも過言はな
い。その卓抜秀抜な豪傑さは、壯と云ふより他は
ない。しかしその方策を實現するの粘着力に
欠けてゐた。方策具現の軍命令下達後
及対意見の幕僚の僅かな二小段に決心が
動搖して、軍命令中止や停止したること、
数回あつた。そしてこの、指揮下部隊に対し
軍司令部の權威を言ふこと、そのさうあつた。

又隸下団隊長との折合も必ずしも良好とは云えな
かつた。軍長は隊長より団長の方が、戦階の上にある
のに、長官は隊長の言動は、動もすれば、軍司令官
の言動に擬して扱せられた。而も、稍高松軍を
以て、この接するに、多量の、隸下団隊長の
軍長は隊長に対する、及感は、個人的風格に對する
ものかあつた。
子りのえつて見て、軍長は隊長は、威風堂々たる
表面下に、むしろ、繊細な感情と、固い心持とを
備へ、ものの、脆せられたるに、様である。

統帥指揮や、これに關係のある、個人的性格の
問題、は別として、沖籠の敗戦の、原因に

の巨匠と云ふであらう。

言を換えて云ふならば後手と先にとり
奪う先制強襲の兵法に倣ひ得らう。

陸海軍の任務分担や攻撃目標等研究
するのみならず、勤く身操を以てに挿提

するの作戦主任者の重大な課題であり

この兵士の価値の重要性を忘失した莫
無空信我当軍者の一大失策であらう。

地上作戦に前衛部隊の兵士は

前進陣地、或陣地の兵士も専ら兵士の

要請から生れに兵士の方式である。と云ふ事は

候補生時代の大学の兵学研究時代といやと

云ふ程度研究した昔ながらの本質を極める

事か出来なくとも航空兵に利用する能力
か其の巨匠と云ふであらう。

曾と私は極端な表現をしたものがあった。

航空軍司令部や兵隊団長は歩兵大隊長

の如く指揮しなければならぬ。

と云ふ事は空中勤務、体験を以てかり

身につけて飛行機の力、長短を以て

知らぬはならぬと云ふ事の一失であつた。

上昇能力や行動半径や燃料搭載量

表に於ていくら記憶してもこれは全く

無価値である。

中絶の兵士と別に思ひ出した事は

一である。

◎編制担当者。燧子機や我々機と何故
三十七機三十九機とするか、その基礎が
全機「よかつた」
燧子機の場合 全機隊格或燧子機
と命中公算に依る燧子効果も
式を併に假定して逆に我隊機数
を定めて入るとある。
我々機の場合は一対一目標に撃ち込み、
場合の対する威力と目標機の機数
の基礎とする。

◎大本を蓄勢中。「虎号兵機隊」
と古子全般作戦の研究会のありその
結論として 戦力増強と古子

ことになった。各幕僚の戦力増強
増強方針について 性能問題 生産問題
燃料問題と色々意見交換した。
私は果言に近々あることには 主務外の
人事上の事である。

「各司令部の人事配置が悪い」と
ある。秦本次長に意見を封せられた後刻
隊に彼の部屋に呼ばれた。この理由を
聞かれた。私は例を引いた。
「ラハウル」にある幕僚は軍刀能や恩賜
組許りの。何もやつてゐる。...
在支隊司令部は「標榜」の名手共は
許り。... 結果の上り下り...

「この船を果敢にその保存機隊に
拘束する事がある。若くは機隊の組合せの
い。

この意見はあとにも支にモ
「にまじりあつた
の支那にゐる航空部隊の長官か
あとい支那しこの
我力的に腹反
我生した事と想する。

○
沖絶長に於ける船と、初撃手は北島が場
から本撃手した。

広森中尉の指揮する一隊十機は艦砲第一隊
の二二二日砲。四ノ東軍軍から山砲にむけし

飛車の達平。北島が場に着陸し居る。

兼陸海航空第一隊併せ二十数隊、南西諸島
各地に渡り待撃する。予定にはなつてゐる。

予定の実現はこの一隊だけであつた。

第一は北島が任務を遂げしに、私に攻羊に由し
指揮する。零命の来たるたのがし。私は

夕刻艦砲射撃の間隙を縫ふに北島が
場にかけた。自島民地(南部)の住民達

は延々と團頭地(北部)に向つて避難の
道中にある。飛も機の来よるの艦砲の

来よるの。群け様をもしよる。時の列は
うごめいてゐる。思ひの外、時が来る。

子と佛蘭西敗戦時の住民の避難体行の

軍の行部は妨害した事と想起する。
広森中尉は凜々しい若い母の持統である。
眼は澄んじめる。怒るは誠に落ち着いてゐた。
案つて来たに單なる核は既に撃備隊の手によつて
再匿撃備中である。

私は広森中尉と会話し、操縦母のや
訓練を知らず。爆装した事になりと女子
艦船攻撃に就く教言をよびケル事。
なりと女子。その程の程の特攻隊であった。
私は特攻隊法に就くものに就く。肯定してゐた。
し如何なる命令と女子のさかには、
屏東以来考へて命令形式に因する判じと
した語論の出来しるなかつた。

特攻隊編成に就くとも上司の指令は「特攻」
である。「⑤第号母の隊」である。
任務は飽くまで艦船撃沈である。死は手段
の結果である。いやしくも命令に手段の結果
を明示すべきにはない。特攻の内容は体當り
であつても体當りな命令にはならない。
その真実は屏東以来確信してゐた
通信船をよび命令を起すた。案外
スロウと筆の送んだ。

（怒神作命令第号）
と書いた。第二号以下は事實なかつた

命令
三十七日の
武烈形は隊は明二十三日 薄明を期し

毒手細薄に誘はする敵艦艇群を
必沈すべし

新陸軍制

命令下達後 重裝備陸軍要領 第一旋田の
要領 三機三編隊の高度差による対立
砲火の分散方法 突撃開始方法 突撃
角が 攻守部隊位置 微細に互り教育
した 理解して是れがどのかの 実地訓練
するゆけにも行かぬ

護衛の終ると 六森中尉は隊員を集めて
話とした

「いよく明朝特攻口 何れもの様に俺に
ついで来り。次の軍へおはせり」

約束の様。今度生れ変わった。さしこまれの
艱苦であらうと 團を憂する 誠心 大は
失はない様にしよう

それとまじい私は呼吸が断たれる様な衝動が
あまけり 事實も立つても居られなくなつた。
私は小群のリーダーはやはなれとめどもなく
流れる感激の舌 悲しみの涙をどうする
ことも出来なかつた

初年兵教官時代に 忠君愛國と云ふこと
口にはした事があるが この数年は
忠君も愛國もあつた事には實際なかつた
戦場になつたからには 憎むべき米軍
一本槍で通して来た。六森中尉の

一言は深く胸を突かす通した様な
至津、至純をこゝ素直と。私は恥のし
くこそ若く特攻の顔を見るに耐え
たのつた。

二十七の徳行

二十三日 黎明、牛島軍司令部を築内して
首里山の上に立つた。他の幕僚や兵達も
住民の一部も今朝の特攻を知つて遠く視望
してゐる。

未だこの頃の薄明のあの短くはるを利用しこの
突撃準備である。

遠く降着の圃である。私の指す所に離陸は刻
に寸秒も狂はるゝ。三機、又三機、次で

又型の山嶺に三機が次々と首里山の上
すまこゆく、大きく西へ横回すると見るまに
嘉手辺に接近する。今まをゆむつてゐた様に
激突してゐるに敵の艦艇が周章して、切ぎ
出した。お空大砲の火を噴きまはしめた
かもはや空に合はるゝ。隼の様に降下する
形も機は吸ひ込まれる様に次々と艦艇に
命中する。火炎のあかり、黒い煙風が艦と
敵子、しほらくして海風が煙風を押しと
そこにはもはや艦艇の姿はなかつた。
一瞬の静寂。何処の山にの山、何方
此方に一歩に立つてゐる兵や住民から一音に
とよめはんに似た嘆息がある。

熱湯の腹の脊から胸へつぎ上へつ果る。
牛島軍司令官はつと子リ玉りて
中央へ電文の起草をこと
として頭と軍令の標目した。

武刺隊の長官は戦後米軍の表に
あるものと時刻海軍令同一である。

長官百パーセントである。私に幾分
なるエのうたる様なる。私に
七十日中の長官は如と部隊も特攻的攻防に
大部分の長官は死してゐる。その長官はは強
いあり悲憤があり個人は勇猛心は強
い部隊としてしるべきものである。

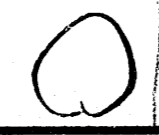
たに異なるところは如と部隊のそれは敵軍に
依つてあり 戦後特攻は一死の直前まで
冷静に自らを操縦棒の操作によつて一死の
軌道に果せんとするところにある。冷静に
死ぬと六子軍は至大の勇気なれば
決して出するものではない。

特攻の問題について

中実

特攻隊は軍令的に法制的に軍首脳部の責任
ではない。特攻隊は ①部隊があり ②時配
の人員器材がある。

今頃になつて 億は特攻隊には反対であつたと
六子人が非難に多い。それは世の風潮と恐れ



この諺やにある。あの傍勢が上も下も
特攻を止むを得ずとしは肯定した。

身を以て又討したのは三好康之少将であり
最も激しく又討志を見せ上甲して来た。

私の防衛総司令部には居る頃には防空特攻
を盛んに中央部から平唆されたし。補任課々

如きは特攻で一人死したう補えて二人やる
とまじい極言された。

防衛総司令部には実際、その中央部の息の
荒らしたに押しまくられた防空特攻隊を縮小

したの、実態はあり司令部や総務課は
はるかく細務したものでた。

妙なる事には特攻を平唆した人々は上甲合せ

た様に母も養育を豫後出来ぬ人々かある。

勿論第一線の若い空軍兵士達は体ぎり以外方法
のないと古くはじめたの何勿論である。

①部隊縮小の人員選定に方つても盡心
報子減私率公にしはられた嫌々ならお願した

者も居らうし。勇気も疑はれるの嫌さに
まるとするに者も居たであらうと一筆書かれた。

大学時代隣の家が 木村本務確少少年はおまを
幼年学校に居た。比島の特攻で死した

その遺言に極めて意を我深い事と入る
「悔しくと思ひながら、そこ、おそろしく

泣きながらいも 揮筆桿を握りしめん
戦ふ事の大罪で、それこそ尊い事

「まのま」とよ子先生の筆、さあ、

私は従来「航空戦術」とよ子モのに対し次の様に考へて主張して来た。

「航空戦術」は戦略部面と戦技部面の領域は極めて比重が大きく戦術部面の領域が非常に少い。現在のものは変らぬ。

「航空戦術部面」は「無」によ子のまは無い。

何故その様に主張して来たかの理由がある。それは航空戦術の根本基礎を知らぬ。航空戦術は殊に陸軍の出、戦科将校の歯の浮く様。

航空戦術を縮み出し、自分の戦術的領域を守らうとした。軍隊の機械化する程、戦術部面の比重が大きくなることと知らぬ。地上空の飛行の回上戦術の様には、或いは敵味方の飛行

場群を数百キロはなして四上に画き各機種を
どう配置するかのどの様な攻守法をとるか下と
上子類の二もてあそんで

戦技を知らずしてこの様な戦術(術)はなり立た
るし又此の様な教育は初級将校に対し
少しも意味のない無価値であつた

この様な風潮に対する又駁の所以述の様な
主張となつたのであり 戦と兵術は無価値とか
無意味であつたわけはなかり

さて沖繩作戦で陸軍航空は如何なる戦術的
運ぶるが行はれたか これは九州や台湾の司令部
への見聞ではなく 現地首里山上から現認した
結果の結論合ひである。

先づ素敵手段である

敵輸送飛行中の船団の目標とあるからこれを捉える
事の重要である。これに対し 或る想像海域に
何度のの角度で数本の飛行線を描き往復の
目視海域に敵の存在を確め様とする方法に
終始してゐる。数々の偵察力の消耗と疲労
を重ぬ日と共に偵察力の減退したに似らくこの
方法が目標を捉え有効な攻撃を加えた事は
一度もなかつた。

私は何とかがうまい方法のなりのと 陽へしてゐたが
此の付いた防衛司令部時代に 愛海城の戦機を
いかくしてゐたか陰とあつた。愛海城の戦機に
普通の飛行機とは軌跡の様子が異なる光景がある。

従つて突撃の容易なる所を敵に見付られぬい
時刻を選定する事あり。離陸時刻、飛行高度
等は総て天表の表により目標上空から逆算して
計り算する事ある。それと見ると押境攻撃も
簡単なる所を攻撃になり。博多攻撃は夜間攻撃
に於てしまひ損害を多量するが、我果の
微少になるかの結果におちいる。

沖籠戦に於て我の戦術指導は実によつて考へられず
行はれた様に思はれた。本島週辺の上空に達する
時刻、特に創意工夫らしいものが見えらるゝのつたし
突撃時刻の天候が夜間になつてしまつた。
「博多」のあの重要な時刻、見られる事少くして
見える態なる時間を利用する事は極め

稀であつた。
は選り取つた作戦の結果、我果の少かつたのは
原因は多々あるであらうけれども、我術指導の拙劣
と云ふ事は、最も大きな原因と見なす事はなるまい。
大言は誇りや観念、我術研究の結果は如実に
我果の上にも、果は國家興亡の上にも、影響を及
及すものがある。

特攻対策の研究不十分なる。おとりの空船に
突入しつたり、訓練の程度に即応しない。攻撃法
の、降下速が、過速になり操舵不能となつて
海中に突入しつもの。教え挙げれば、まりのない。
我果の表にしろ、台湾航空部隊は九州部隊や
海軍のも自分の隊と見做して、先手を打つて考へる事

と云ふやり方が、支那の討匪效果の様には甚なる
效果になつて現はれた。此の點に及んで尚且つ
その様な成功道德にもあつた。

要するに眞の航空技術にも特異なるものもなく
軍事を平淡に綜合考察出来る方法に対する
研究への極めを不足してゐると云ふも過言では無い。
特攻攻撃の、效果についてその教育とも云ふべきものと
現地で目撃した結果、各方面に打電した
後、まこところによると、第八軍野田に於ては
自分の不手際、批判、批評と解釈して
極めを不輸たな面持ちであつたと云ふ
(台湾方面軍幕僚談)

作戦第一日の沖繩司令部

三月二十二日天明と共に米軍の第一撃手があつた。
未だ宿舎でゴキヤリしてゐたの、芝川の核攻撃掃射
で、氣を取り直す

國書と手紙と軍刀眼鏡。それを入をひつふんじ
や、学校の司令部に走る。おまめりらの追ひかけを
事する様だ。核攻撃掃射が続つてゐるのを、道の
真平は走れな。石垣の境に飛び込んで、校舎
に近づくと

二階の事務室にといひ、葉を用意の作戦関係
書類を一抱えして廊下に出た。廊下に

空に機銃の弾痕がある。ちらほら
枝の先に人影が見える。
司令塔、洞窟は百木洋りの直距離の
ところにある。

状況が如く洞窟は奥の奥にあり、
奥の位置早く着いた。勤務者の四五人
ある丈じ坑道の中は赤い電球の
光がくっきりとぬに。片側壁に書類や
器具とほろり込み。再び外にありし
首尾山上にのり上る。

此処は自軍の展望台の破壊も、
早急する事だろう。予め構えしこある監視味
掩体に入る。

ほんとうのとおりこの掩体と古くとも異蓋の
に果てはいじめた落ちた。とれ支つ敵情とと
古く戦者の自軍のうららう。
母の機は四、五機と一掃となつてあちこちの
上空を乱舞してゐる。しく、ぐる、艦我機がある。
母艦群は東界にはなるも東方海上の存在。
西海面には艦形不詳の艦隊のうららう
と浮いてあり陸上に向つて艦隊を射撃す
を繰り返してゐる。

敵の艦隊の砲撃を開始する。互に
艦我機の機銃掃射とする。誰も知らなかつた
陣地軍許りはなく海軍も航空部隊も方面軍
も中絶部もその監視すらも知らなかつた。

電は或の遊隊隊もの三羽の付のつた
さかの字相想ひある。
船砲射撃南地は
重要である。

又洞窟に帰る。情報や通信関係の
薬丸若葉や三宅若葉の殿に顔を出して
の。高級若葉八平士はとも携ちらりて
洞窟に入ると未だ。井人な流石に緊張してゐる。
今幕僚達の一室に会して話を別とこり立て、
会議やお合せをする。女ももろしと、
しるゝ。日々業務もとも女子である。
特に敵。飛鳥機と艦艇がある限り
第三工場のりくらに命令のりけし見ても何にも

たうぬ。しるゝの通信情報たけがあり
むしり。手もちふたにの様なきれひする。
し。後ひうきると見るとこの手もちふたにも
似た作。あ。日。司令部の首脳に或る動搖
の様なもの。あ。若葉を見逃し。若葉の出来に。
牛島司令官は別室を連ねて。洞窟外の
そちら。こちらを。漫歩し。相変らず。微笑
を。進。あ。下の。走り。怒鳴り。し。
ぬる。と。見。こ。ぬる。
長。若。若。長。は。日。あ。ゆ。り。の。よ。い。草。地。に。ト。ツ。カ。と
牌。を。あ。ら。し。泰。し。自。若。飛。来。す。る。飛。り。機。を
目。に。見。訪。め。た。あ。ら。し。手。に。ウ。イ。ス。キ。ー。グ。ラ。ス。を
持。て。あ。ら。し。大。笑。し。こ。ぬる。相。変。ら。ず。取。り。ま。き。連。い